令和６年度 第４回　エルシーブイ放送番組審議会

■開催日時　令和７年３月２５日（木）　午後４時00分～午後５時３０分

■場　　所　エルシーブイ株式会社　本社会議室

■出 席 者　委員総数　５名

出 席 委 員　市 川 純 章　委員
河 西 滋 子　委員
赤 沼 喜 市　委員
井 上 淳 哉　委員
菊 池 大 介　委員

放送事業者側　（８名）

深井　賀博　代表取締役社長
大野　弘信　専務取締役
堀川　久志　放送制作部　部長
吉田　和晃　放送制作部　コンテンツ制作課長
小池　利幸　放送制作部　放送コミュニケーション課長
早川　達朗　放送制作部　編成課長
大谷　唯　放送制作部　放送コミュニケーション課
（審議対象番組ディレクター）
内藤　由里子　事務局

■議　事

１．審議事項

【審議番組】　「さくら猫が花開く地域へ」
ニュース＋アイのシリーズ企画（全４回）

＜委員からの主な意見＞

□番組を評価する意見

・タイトルを見ただけでは内容がわからなかった。「さくら猫」は初めて知った。重く受け止めて考えていかなければいけない問題だと感じた。

・TNR 活動（T 捕獲する。N 不妊去勢手術してさくらの形に耳をカットする。R 元の場所にもどす）を１回ごとに取り上げ、テーマとして扱っていたのでわかりやすかった。

・一匹の猫に、いろいろな人の様々な思いがあることが真剣に伝わった良い内容だった。

・テロップの文字での説明もよくできている。言葉だけではわかりにくいことも（画面の）文字を読むことでわかりやすくなった。

・単発企画から、30 分番組を制作する過程での審議はこれまでになく、面白い企画だと思う。

・とても良い内容だった。見るだけでなく、どうやってアクションをするとよいか、作品をみることで、見た人の行動が変わる。猫を見たときに、すぐに耳（の形）をみるようになった。

・（過去に放送した回が視聴できる）QR コードの表示があったことはとても良かった。見逃した人が過去の作品を見ることができ、プレイリストとしての役割をもっていて、全話をまとめてみることもできる。

・シリーズ４回の制作にはエネルギーが必要だったと思う。回を重ねるごとに（伝える側の）表情が変わり本気度が伝わってきた。小さな命かもしれないが、意図されたことが（作品に）反映されていて、良い内容だった。

・しっかりと取材していて、制作者のやりたい意欲を活かしたことはとても良いことだった。

・殺処分数が減っているというが、ただ数字を提示するだけではミスリードにつながりかねない。
映像の編集の良いタイミングで、数字を紹介することが出来ていたと思う。猫に餌を与えていた女性が紹介されていたが、(取り上げ方次第で、悪い印象になってしまうが) 悪者にならない配慮がされていた。

□番組をよりよくするための意見・提言

・アナウンサーのコメントで、「こっから」と聞こえた。「ここから」が正しくだと思うので注意をしてほしい。

・扱う内容がダークな印象でもあり、視聴者も暗い気持ちになってしまうと思うので、明るいナレーションが良かったのではないか。

・命を扱うヘビーな内容で、ナレーションも重厚で低いトーンであり、見ている側もダーク、重みを受け止める。例えば、かわいい野良猫の映像のあとに、実は…という構成であればメリハリが出てくる。

・見た人がどうやってアクションを起こせばよいのか？団体の連絡先としての電話番号を紹介するだけ

でなく、こんな時はどうしたらよいかとか、寄付の窓口はどこにあるのかなど、行動をしようとする人の（気持ちを）背中を押してくれるような人を動かす番組になることを期待している。
・地域性がなく、平坦なつくりだった。例えば、この地域での統計値はどうなっているのかがあれば、地域性として訴えることができる。この地域で（生活する人たちが）どのような行動をすることができるのか、活動の支援につながるゴール、不理解を理解へつなげるゴール、明るくするゴールがあってもよい。身近なところでおきているという地域との関わりを意識するとよい。
・（見た人に）ただ知ってもらうだけでなく、どうすれば良いかを考えてもらうこと、事実を伝えることは当然として、それだけでなく、どうしてほしいのかという作りこみ方があってもよい。
・『猫とどう向き合うか』というコメントがあった。（作品をみて）何かをしないといけないという思いはある（けれど、どうしたらよいのか）。具体的にわかればよかった。
・諏訪地域では（東京で暮らしていたときよりも）野良猫をみない印象がある。この地域の統計性、殺処分数は？（回答：ゼロ）実態をどう方向づけるか、理論的に説明できれば、説得力がでてくる。

以上